

遺族会

高津区支部 小川 英子（姪）

戦没者 小川 隆夫

戦没地 南洋群島

私は叔父（父の弟）二人が戦死及び戦地から帰還途中に命を失い、その遺族として遺族会に入っております。上の叔父は二十八歳で海軍一等兵曹として「昭和十九年二月十七日、南洋群島方面ニ於テ戦死」との文言が戸籍謄本に記載され、靖國神社から「小川隆夫命」と祭神之記が届けられ、靖國神社に合祀されて神様になっています。

しかし、下の叔父は二十歳で「昭和二十年八月二十三日午前十一時、愛知縣愛知郡葉投見村大字服部字池畔（空白）ニ於テ死亡」と戸籍謄本に記載されており、「戦死」との記載がない為に靖國神社には入れません。

一刻も早く故郷に帰りたいのでしよう、満員列車の屋根にしがみつき、振り落とされて線路脇にて絶命していたのを、服に縫い付けてあった名札から身元が判明して、家に連絡があつたと母から聞いています。行旅死亡人の立場で一生を終えたのです。

両親は独身で亡くなり、老いた姉、妹、弟は存命していますが、やがて此の世を去ります。

英霊として上の叔父は靖國神社に生き続けますが、下の叔父は靖國神社に祭られることもなく、早晩「此の世にその人が生きていた」と覚えていてあげる人もいなくなります。墓石にしかその存在を証明出来ない叔父にとって、遺族会は自分を見護り、属せる唯一不可欠の場所として望むところでありましょう。

遺族、遺児に対する国の援護対策は、必ずしも充分と言うものではありませんが、それぞれが国難に殉じた遺族としての誇りをもつて、戦後の苦難を乗り越えて来られました。

戦後六十余年経過した現在では、各々の遺族は、英霊の犠牲に報い、恥じないことを心がけて生活をしています。

今後の遺族会活動は会員の高齢化に伴う会員の減少は避けられず、新たな方向性を模索する段階に差し掛かっていると思います。

それぞれが与えられた生命、寿命を戦争や紛争により奪われることなく、その生命、寿命を全う出来る平和な世界を目指して行動すると共に、戦争の中で短い生涯を終えられた幾多の英霊の御霊の安らかなることを祈り続けると共に、愚かで悲惨な戦争を、二度と繰り返すことのないように語り継いでゆくことが、遺族である私たちの使命であろうと思っています。